

母「それは、どういうことですか。」  
 与右衛門「私はお母さんといっしょに大洲で暮らすため、殿様におひまをお願いして、ようやくお迎えに来たのです。」

母「えっ、この私が大洲に行くのですか。」

与右衛門「そうです。お母さん、喜んでください。これからは私といっしょに安心して暮らせます。お母さん、私と大洲へ行きましよう。」

お母さんは、与右衛門さんの話を聞いて、じっと考えこみました。与右衛門さんのやさしい気持ちに心を打たれました。しかし、思いがけないことを言いました。

母「お前の気持ちは、涙が出るほどうれしく思います。しかし、私は小川村を出ることがなく、知らない土地で暮らすことは、とても不安です。その上、船酔いがひどいので、遠い大洲まで船旅をするのができません。私はこのままずっと、この小川村で暮らしていきたいと思います。与右衛門、どうか、年寄りのわがままと思って、許しておくれ。」

与右衛門「お母さんといっしょに暮らしたいという、私の願いを聞いてください。」

母「私のことは心配しないでおくれ。おまえのやさしい気持ちをあげみにして、元気に暮らしますよ。」

お母さんの気持を聞いた与右衛門さんは、困り果てました。

与右衛門「殿様に仕える身では、この小川村にいようともしても許されない。しかし、お母さんを残して大洲にもどれば、親孝行ができない、困ったことだ。」

⑦ 与右衛門さんは、暗くしずんだ心で、すぐごと大洲に帰ることにになりました。

与右衛門「私の気持ちが分かってもええたら、いっしょに大洲で暮らせると思ったのに。お母さんは、一生ひとり暮らしすることになってしまおう。」



お母さんのことばかりを考えていました。しばらくしてからのことですが、突然、はげしい咳が出て、止まらなくなりま

した。  
 与右衛門「コンコン。ゴホン、ゴホン。」

与右衛門さんは、咳をしているうちにのどがゼーゼーとなり出し、息が止まるかと思うほどの苦しみをしました。

船の客「おさむらいさん、喘息の発

作のようだね。時々起こるのかい。」

与右衛門「いえいえ、こんなことは初めてです。コンコン。」

幸い、周りにいた人達から、親切にしてもらい、何とか発作も治まりました。ようやく、大洲の港に帰り着くことができました。

与右衛門「皆さんのおかげで、命拾いができました。ありがとうございます。」

船の客「苦しそうだっただけで、治まってよかった。しばらくは気をつけな。」

与右衛門さんは、船のお客たちに深々と頭を下げ、家にもどりました。しかし、この時から、与右衛門さんの喘息は持病になり、たびたび発作を起こすようになりました。

#### ⑧ 〈半分まで、引く〉

与右衛門さんの弱った体は、数日寝込むと何とか治りましたが、お母さんのことで悩む日が多くなりました。

与右衛門「お母さんの年になると、急に見知らぬ土地で暮らすのは大変かも知れない。それに船旅に弱いのも本当だ。しかし、どうすればいいのだろう。」

与右衛門さんは、毎日、毎日、考えているうちに、こんなことを思いつきました。

与右衛門「そうだ。この私が殿様に おひまをもらって、小川村に帰れ



ばいばいのだ。」  
 この考えが決まると、ようやく、与右衛門さんはぐつぐつと眠れるようになりまし

#### 〈全部めく〉

数日後、家老の家に行きました。家老「中江殿、どうぞお上がりなさい。どんなご用ですか。」

与右衛門「近江の国に、年老いた母が一人暮らしをしております。大洲へ連れてくるつもりでしたが、いろいろな事情がありまして、無理でした。母の世話をするため、私におひまをいただけるよう、お殿様をお願いをしていただきたいのです。」

家老「そうでしたか。親思いの中江殿の気持を殿様に申し上げ、お許しをいただけるよう、お願いしてみましよう。」

家老は、快く引き受けましたが、心の中で与右衛門さんの人柄や、すぐれた学問の力を大洲で生かしてほしいと考えていました。そこで、殿様には、伝えませんでした。

#### ⑨ 〈場面の三分の二まで引く〉

与右衛門さんは、お許しが出るの